郷に従う

綿抜豊昭　情報学群／知識情報・図書館学類
図書館情報メディア研究科図書館情報メディア専攻教授
（わたぬき　とよあき／日本図書学）

郷にいる

筑波大学と合併する前の図書館情報大学に勤めさせて戴くようになって、とまどうことが少なからずあった。

それまで、私にとって学問とは、哲学、歴史学、文学といった、いわゆる「文系」の学問であった。また研究は、根源を明らかにし、真理を探究するものと考えていたため、「未来に役に立つ」「お金になる」ということとは、直接には関係のないものであった。

ところが、図書館情報学の主たるところはそうではなく、実学であった。まず、はじめに理念・理想があり、理想の図書館を実現するために、マネージメントやシステムなどをどのようにしたらよいか、という、役に立つことを研究するものであったのである。当然ながら、一つの図書館にのみに通用することではなく、広く使える知識体系を得ることを目的としている。

たとえば、ピーター・ラビットの翻訳が、世界で最初に日本でなされたことを明らかにしたことは、人文系の学問では意味がある。Hなことを考えると鼻血が出る、ということは、医学的にはないそうだが、それをはじめて描いた漫画家を明らかにすることも意味がある。

しかし、これらは汎用性もなく、何らかの予測に結びつき、多くの人の生活を豊かにすることもなく、ましてお金になるといった有益なものでもない。

ある図書館に所蔵される資料について調査・分析して、他の公共機関に所蔵が確認されない、日本で唯一のものかもしれないことを明らかにしても、

「役に立つであろう、何らかの目的のために、資料を調査・分析するのではないか？」

と、理念・理想をともなう目的を問われる。

また、これまでに作成されることがなかった、歴史ある図書館の和古書の目録を作成しても、目録そのものの価値はほとんど認められず、

「単館の目録では汎用性がない」

といわれる。

「まず過去」をみていたが、「まず未来」を

みなければならない状況になったのである。

ということで、今年度、学群で受け持った講義は次のとおりである。

知識資源論

図書館情報学では、図書（情報）の「分類」は重要事項の一つである。

図書館が扱う資料を、まず一般と専門の二つに分類する。学術情報を主に「専門」とする。

つぎに専門資料を、かつてよく行われた学問の分類である、人文科学、自然科学、社会科学の三つに分類する。それぞれの資料について講義するのが、「専門資料論」という科目で、司書資格を得るための必須科目となる。

本学群では「専門資料論」に相当する科目を「知識資源論」と称している。その担当者の一人として、人文科学資料について講義した。

また関連して「人文科学資料論」という科目も担当した。

自然科学や社会科学の目的の一つは、予測力を持つ知識体系を得ることであろう。たとえば台風の進路が予測できたりして、役に立つ科学であり、それはお金になりうる科学でもある。

一方、人文科学は、英語に訳すると「科学」がつかないという。欧米では、「人文科学」ではなく、「人文学」ということらしい。哲学、歴史、文学などは、先にのべたように、予測ではなく、根源をもとめるもの、真理を探究するものであり、もし「役に立ち」「お金になる」ことがあっても、それは副産物にすぎない。

人文科学は「過去」が大事であるから、「過去」を切り捨てることがむずかしい。

どちらかといえば未来をみる自然科学の資料が更新型なのに対し、人文科学は蓄積型である。しかし、いくら蓄積型といっても、何にもかもが図書館に必要なわけではない。

こうした性格を持つ人文科学の資料を、図書館に勤める者として、どのような基準でふるいにかけていくかといった知識の提供が、講義の内容の主なところであった。

日本図書学

「日本図書学」とは、日本の図書の歴史や特徴について説明し、特に和古書（和装本）の整理・保存・提供などにあたって必要な知識を提供する講義である。新刊本は、規格がほぼ同じであり、あらためて講義をもうけるほどのこともないが、それぞれに個性がある和古書は、新刊本とは異なった、多くの知識を必要とする。

似たような学問に「書誌学」というものがある。これは、図書にまつわることの起

源や、特質について考究する学問である。日本図書学はあくまでも図書館側の実務知識といえよう。

図書館はどうあるべきか、といった高い理念・理想のもと、それを実現するためにどのように経営するか、といった領域の講義と異なり、もし和古書が寄贈されたら、また未整理の和古書があったら、それをどのように扱い、目録を作成するか、といった知識を提供する講義である。

極力、現物をみせながら講義したので、体験学習といった一面もあった。

たとえば国文学の研究者は、資料について、歴史的に意味のあるものだから貴重だとか稀少なものだから貴重だとか価値判断を下すが、図書館に勤める者にとっては、まずは、どの資料も全体の中の一資料でしかない。分類・整理し、提供することが第一に重要であり、それが貴重か否かは、それ以後のことである。貴重となれば保存の仕方も異なる。こうしたことなども講義した。

古文献講読

日本図書学との関連科目である。和古書は、くずし字、変体仮名で書かれている。これが判読できないということは、外題、内題、作者名などがわからないということである。となれば分類・整理等ができない。そこで、それが読めるようになるための講義である。

あくまでも整理のために、外題、内題などが読めるようになることを第一目的とした。

郷に従う

自分としては、図書館に勤めた場合に役に立つであろう知識を提供したつもりである。

ただ、かなしいことは、いずれの講義も、図書館に勤める人のすべてが必ず知っておかねばならない、身につけておかねばならない、というものではなかったことである。

蛇足ながら、来年度から新カリキュラムでの講義がはじまる。同じ穴の狸ではなく、古郷は遠きものとして、新たなる郷に適した講義をしたいと思っている。